平成２６年度
第１回琵琶湖博物館協議会

日　時　２０１４年１２月１７日（木）
　　１５時００分～１７時１４分
場　所　滋賀県立琵琶湖博物館１階セミナー室

会　議　次　第

１　開　会

２　議　事

（１）会長・副会長の選出について

（２）琵琶湖博物館中長期基本計画２０１４年度行動計画の中間報告について

（３）新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について

（４）その他

３　閉　会

〔１５時００分　開会〕

１　開　会

○司会（中鹿副館長）：それでは、定刻となりましたので、ただいまから平成２６年度第１回琵琶湖博物館協議会を開催させていただきます。

私、本日の司会進行を務めさせていただきます当館の副館長、中鹿でございます。どうぞよろしくお願いします。

会議に入ります前に、お願いを申し上げます。

県では、会議につきましては原則公開ということで、本日につきましても公開とさせていただきますので、よろしくお願いします。

また、当協議会の定足数は、委員の半数以上ということでございますけども、本日は２名の委員の方がご欠席ということで、１５名中、１３名の委員さんの出席でございますので、会議は成立してございます。

それでは、開会に当たりまして、当館の篠原館長よりご挨拶を申し上げます。

○篠原館長：琵琶湖博物館の館長の篠原です。

今年度第１回目の琵琶湖博物館協議会を開催することになりまして、皆様、こんな大変な天気のときに、天気予報によれば不要不急の外出は控えるようにというふうに言われていましたが、きょうは重要な会議でございますので出ていただくことになりましたけれども、お忙しいところを出ていただきまして、大変ありがとうございます。

琵琶湖博物館も開館して１８年になりますけれども、昨年度の入館者数が大体３６万人ということになりまして、当初から比べると１０万人ぐらい減少しております。人気俳優も寄る年波に勝てず、だんだん人気が衰えてきたというところで、ここで一応化粧のし直しということを考えておりますけれども、１８年間経過しまして環境や自然に対する価値観とか、あるいは開館当時なかったような環境問題が顕在化し、環境や自然のことに関して先進的なこの博物館を取り巻く社会情勢はむしろ非常に厳しいものになっております。

また一方では、１８年間、当初いた研究者たちは、今はほとんどいなくなり、当初からいる人たちは、わずか私の右左に少し残っておるだけです。ということは１８年間の研究蓄積も相当あることになりますので、これをもとにして新しくリニューアルしようということで、平成２８年、２年後の開館２０周年をめどに、展示更新を初め、展示交

流空間の再構築、つまり新琵琶湖博物館の創造を目指して計画づくりを進めております。

昨年度は、この琵琶湖博物館協議会で新琵琶湖博物館の創造につきましていろんなご意見をいただきまして、「新琵琶湖博物館基本計画」を策定したところです。

今年度はそれに基づきまして、「新琵琶湖博物館創造第１期実施設計」という実施計画ができたわけですけれども、これを中心に今回は協議していただくという形になります。リニューアルに向けて、より具体的な内容について議論していただきたいと思っております。

もう一つは、中長期計画というのが来年で終わります。ですから、今度は２０１６年度から２０２０年の中長期計画というのを来年度立てていくことになりますが、それでリニューアルを含んで、これもまたいつか皆さんに議論していただきたいというふうに考えております。全体にリニューアル一色という形になっておりますけれども、その辺を中心に、よろしくご議論していただければというふうに思います。

これから当博物館がより世界に開かれた博物館としてどんどん研究なども進めていき、またリニューアルも進めていくつもりですので、皆さんのほうからいろんな意見をいただいて、よりよいものにしていきたいと思います。きょうは、よろしくお願いしたいと思います。

○司会（中鹿副館長）：ありがとうございました。

本日の会議は、９月に委員を改選させていただきました新しいメンバーでの初めての会議ということでございますので、ここで各委員のご紹介をさせていただきます。

お手元の資料の委員名簿をごらんいただきながら、配席図が「あいうえお」順になってございますけども、配席図の順番でご紹介をさせていただきます。

まず、上原委員様でございます。

○上原委員：こんにちは、上原です。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、河上委員様でございます。

○河上委員：河上です。どうぞよろしくお願いします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、菊池委員様でございます。

○菊池委員：菊池と申します。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、北島委員様でございます。

○北島委員：北島です。よろしくお願いします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、津屋委員様でございます。

○津屋委員：津屋です。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、中田委員様でございます。

○中田委員：中田です。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、中坊委員様でございます。

○中坊委員：中坊でございます。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、橋詰委員様でございます。

○橋詰委員：橋詰です。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、伴委員様でございます。

○伴委員：伴です。よろしくお願いします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、廣畑委員様でございます。

○廣畑委員：廣畑です。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、松江委員様でございます。

○松江委員：松江です。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、水野委員様でございます。

○水野委員：こんにちは、水野です。よろしくお願いします。

○司会（中鹿副館長）：続きまして、山西委員様でございます。

○山西委員：山西です。よろしくお願いします。

○司会（中鹿副館長）：ありがとうございました。

続きまして､本日出席をしております事務局の職員を自己紹介をさせていただきます。

○篠原館長：先ほど言いました琵琶湖博物館館長の篠原と申します。よろしくお願いします。

○事務局（高橋副会長）：４月から副館長が２人制になりまして、２人目の新米の副館長、高橋でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（藤岡上席）：藤岡と申します。どうぞよろしくお願いします。

○事務局（グライガー上席）：グライガーと申します。よろしくお願いします。

○司会（中鹿副館長）：中鹿でございます。よろしくお願いします。

○事務局（藤村室長）：新琵琶湖博物館創造準備室、リニューアルの準備室ですが、そこの室長をしております藤村です。よろしくお願いします。

○事務局（用田上席）：用田といいます。よろしくお願いします。

○事務局（八尋部長）：研究部長の八尋です。よろしくお願いします。

○事務局（山川課長）：企画調整課長の山川と申します。よろしくお願いいたします。

○事務局（松田部長）：事業部長の松田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（田中課長）：総務課長の田中と申します。よろしくお願いいたします。

○事務局（桑原所長）：環境学習センター所長の桑原です。よろしくお願いします。

○事務局（白井補佐）：滋賀県環境政策課の白井でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局（桝永）：交流担当グループリーダーの桝永です。よろしくお願いいたします。

○事務局（戸田）：資料活用のグループリーダー、戸田です。よろしく。

○事務局（亀田）：リニューアルの準備室でＣ展示室を担当しております亀田です。どうぞよろしくお願いします。

○事務局（楠岡）：展示担当のグループリーダーをしている楠岡と申します。よろしくお願いします。

○事務局（大塚）：博物館学研究領域のグループリーダーの大塚と申します。よろしくお願いします。

○事務局（野村）：企画調整課の野村と申します。よろしくお願いいたします。

○事務局（廣瀬）：準備室の廣瀬でございます。よろしくお願いいたします。

○司会（中鹿副館長）：以上でございます。

　それでは、議事に入ります前に、今回新しく委員さんになっていただいた方もございますので、まず琵琶湖博物館の概要ということで、お手元の資料の要覧を使って、高橋副館長より説明させていただきます。

○事務局（高橋副館長）：それでは、１０分以内で要覧を使って説明させていただきます。ちょっと座らせていただきます。失礼いたします。

　お手元の要覧の１ページ目をお開きください。設置の目的が書いてございます。琵琶湖は４５０万年という古い歴史を持った湖でございますけれども、ただ古いだけではなくて、そこに以前から人々が住みついて、文化的古代湖、あるいは生命文化複合体などというふうに呼ばれています。そういった琵琶湖は多面的で、しかも非常に多くの価値を持った湖であるということで、私たちはその価値を見つけ出して、また発信していく

というような事業をしております。

そういう意味で、この博物館の使命としては、中段よりちょっと下のほうに書いてございますけれども、研究施設であり、文化施設であり、生涯学習施設であって、交流と情報のセンターとしても機能するという、物すごくたくさんいろんなことをしなきゃいけないということになっておりますけれども、全部が１００％できるかどうか、なかなか難しいところもございますけど、目指して、事業をやっているところでございます。

現在、先ほども話がありましたように、琵琶湖博物館の中長期基本計画「地域だれでも・どこでも博物館」というのをやっておりまして、第３期目ということでございます。後ほどこの中長期計画の２０１４年度の中間報告につきましては説明がございます。

２ページのほうに基本理念というのがございますけれども、この３つの基本理念を実行すべく活動しているところでございます。「湖と人間」というテーマを持った博物館、そしてフィールドへの誘いとなる博物館ということで、この展示、あるいは私たちがやっているいろんな事業をきっかけとして、来られた方々が、利用される方々が本当の博物館が地域やあるいは身の回りにあるということを知っていただいて、そういったところを見詰めていただくというようなことができるように、私たちはフィールドへの誘いということを大切にしております。

そして、この博物館の３番目の理念として、交流の場としての博物館、これを大切にしているわけですけども、人々がここに集まって交流し、参加し、そして使える博物館になりたいというふうに思って、現在活動をしております。

３ページのところにその活動方針というのがございます。ごらんください。博物館法というのが博物館にありますけども、博物館法には資料の収集、展示、そして調査・研究をしなさいというふうに書いてございますけれども、琵琶湖博物館ではあえて調査・研究を１番目に置いております。それと申しますのも、この４ページに木の絵がありますけれども、やはり根や幹の部分である研究・調査、こういったものをしっかりしないと木が育たない、枯れてしまう。こういったものを利用して独創的な交流、サービス、展示、いろいろそういうことを展開していきたいというふうに思っているところでございます。

５ページ以降は、それぞれの事業に関する活動を簡単に書いてございますけれども、５ページのところには研究・調査というのが書いてございまして、研究は総合研究、共

同研究、専門研究という３つからなっております。詳細につきましては、お手元に配りました研究業績目録、博物館の業績目録というのがございまして、ここにどのような研究をしているかということが書いてございますので、また後でごらんいただければありがたく思います。

こういう研究を行うに当たっては、県のお金だけではなく、外部資金ということで文科省の科学研究費なども外部から取りまして、やっております。琵琶湖博物館は県立博物館としましては、全国で最も多い採択件数、配分額も一番多くなっております。そのほか、環境省とか農林水産省などの外部資金も使って研究をしているところでございます。

７ページをごらんください。交流サービス活動というのがございますけれども、この中でユニークなのは、利用者主体の事業という「フィールドレポーター」、「はしかけ制度」、こういったものが博物館の特徴となってございます。博物館を利用する人たちが主体的に活動するような交流活動というものを大切にしていこうというふうに思っております。

９ページのところには、情報発信事業というのがあります。

１０ページには、資料整備活動というのがございますけれども、非常に広い収蔵施設がございまして、約９０万点の資料を保管してございます。こういった資料を使って展示活動や交流活動、あるいは研究を行うということになります。

１１ページ、１２ページも資料のお話でございます。

１３ページからは、展示のお話がございますけれども、常設展示では「琵琶湖のおいたち」「人と琵琶湖の歴史」「湖の環境と人々のくらし」、そして「淡水の生き物たち」というような展示をやっておりますし、子どもたちを中心に楽しめる「ディスカバリールーム」あるいは「屋外展示」というものもございます。

そのほか、企画展示も年に一遍、夏場から秋にかけてやっておりますけれども、今年度は「魚米之郷－太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし－」ということでやっておりまして、お手元にその図録があると思いますけれども、好評を博したところでございます。

現在、先ほども話がありましたように、年間３６万とか３７万人程度の展示来館者数がございます。

その次の、１９ページのところには組織図がございます。館長以下、副館長、総務部、

事業部、研究部と、そういう３つの部からなっておりますが、学芸員は研究部に所属すると同時に総務部や事業部に属しておりまして、研究と事業の両方をやっていくということになっておりますし、現在は総務部のところに新琵琶湖博物館創造準備室というのがございまして、こういったリニューアルの仕事もしていくということになっております。それぞれ１００％の仕事を期待されるので、２００％、３００％、力を出し切らないといけないというところで、現在一丸となって頑張っているところでございます。

沿革と経緯でございますけれども、２０ページにありますが、１９７９年に県の高等学校理科教育研究会から博物館をつくってほしいと要請書があったことが始まりというふうになっております。８９年には、基本構想ができまして、学芸員の第１号が採用されました。先ほども挨拶しました山川でございます。

その後、展示の基本設計や実施設計、あるいは建築の基本設計、実施設計を行いまして、準備室のある博物館ということで、準備室時代にも調査・研究や展示、あるいはセミナー、シンポジウムなども行いながら、９６年には琵琶湖博物館がオープンいたしました。

現在、１８年ほどたちましたけれども、リニューアルをしようということで、２０１２年には琵琶湖博物館の創造準備室というのができまして、リニューアルに向けて作業を進めているところでございます。その話も後ほど担当のほうからさせていただくことになると思います。

それ以降のところでは、２３ページに施設の説明、それから２５、２６と、ずっと施設でございます。あと、条例でございますとか、そういったことがございます。このあたりは後でゆっくりと読んでいただくということで、８分２０秒ほどで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

２　議　事

○司会（中鹿副館長）：それでは、引き続きまして、議事のほうに入らせていただきます。

本来ですと、会議の進行につきましては、お手元の資料の博物館法、あるいは滋賀県立琵琶湖博物館の設置および管理に関する条例抜粋がございますけども、この条例の第９条第３項によりまして、会長は、会議の議長となるというふうに定められております。議事の進行につきましては、会長にお願いするということですけれども、新しく第１０

期の委員さんのメンバーということで、現在、会長がおられませんので、会長決定までの間、事務局のほうで議事の進行をさせていただきます。

（1）会長・副会長の選出について

○司会（中鹿副館長）：それでは、まず、議事の１つ目でございます。会長・副会長の選出でございますけども、先ほどの条例の第８条によりまして、会長・副会長は委員の互選によって定めるというふうになってござまいますけども、いかがさせていただきましょうか。

○中田委員：お任せいたします。

○司会（中鹿副館長）：ありがとうございます。

お任せいただけるということでございますので、大変僭越でございますけども、事務局のほうからご提案をさせていただきたいというふうに思います。

事務局といたしまして、会長につきましては、今回新しく委員にご就任いただいたところですけども、博物館の運営につきまして大変ご造詣の深い、大阪市立自然史博物館の館長の山西委員様にお願いしたいというふうに思います。

副会長につきましては、前回から継続で委員をしていただいています、結・社会デザイン事務所代表の菊池委員様にお願いしたいというふうに思いますが、いかがでございましょうか。

（拍手）

○司会（中鹿副館長）：ありがとうございました。

それでは、皆様の同意をいただいたということで、会長には山西委員、副会長には菊池委員にご就任いただきたいということでよろしくお願いしたいと思います。

それでは、山西委員様、会長席のほうへご移動よろしくお願いいたします。

以降につきましては、山西委員様、どうぞよろしくお願いいたします。

○山西会長：それでは、皆様のご推薦をいただきましたので、会長ということで大変僭越ですけども、以後の議事の進行を司らせていただきたいと思います。座らせていただきます。

私も委員になったばかりですので、これまでの協議会がどういうふうに運営されてきたか全く存じ上げませんし、私と一緒に今回新しく委員になられた方もいらっしゃいま

すけども、以前から委員としてご活躍されている皆さんもたくさんいらっしゃると思いますので、どうぞ、この会議の運営についてはご指導のほどをお願いしたいと思っております。よろしくお願いします。

（２）琵琶湖博物館中長期基本計画２０１４年度行動計画の中間報告について

○山西会長：それでは、議事の２番目のほうに入らせていただきます。

中長期基本計画２０１４年度行動計画の中間報告について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（山川課長）：企画調整課長の山川です。申しわけございませんが、座ってご説明させていただきます。

皆様のお手元の資料、Ａ３サイズの中長期基本計画第３段階活動計画と、それから２００５年に策定しております「琵琶湖博物館中長期基本計画」と「地域だれでも・どこでも博物館を実現するために」という資料を使ってご説明したいと思います。

開館してから５年後の２００２年から中長期目標を定めまして、それに対して３つの基本理念、湖と人間というテーマを持つ、フィールドへの誘いとなる博物館、交流の場という３つを基本にしながら、目標である「地域だれでも・どこでも博物館」を実現するために９つの基本方針を立てております。

基本計画の説明書のほうの５ページをごらんください。中長期計画では、「博物館機能の強化」と「環境の整備」という２つの大きなカテゴリーに分けて、それぞれ５つと、４つの方針を立てております。

これを、次の６ページを見ていただきますと、５年単位で段階的に行動計画を立てて実行していくということで、２０１４年度は第３段階の４年目を迎えるということになっております。

それでは、今年度の行動計画とその中間報告を報告させていただきます。

Ａ３の資料のほうをごらんください。まず、「博物館機能の強化」で、「資料が活用できる博物館」を実現するためにということですが、先ほどからお話が出ておりますように、２０１６年に展示リニューアルを目指しており、おのずと展示リニューアルを支える収蔵資料の充実を図っていくということで、今年度は特に寄贈資料の大口のコレクションの整理を進め、活用できるようにということで進めております。特に、過去の企

画展示等で制作した資料も、今度のリニューアルには生かせようと計画を進めているところです。

さらに、研究で得られているデータをできるだけ公開していこうと、現在準備を進めているところです。

２つ目の「研究を進めて活かせる博物館」を目指して、総合的琵琶湖研究をいかに進めていくかということですが、地域の人々とともに研究・調査を行い、それを公表していくということを進めようということで、今年度は多賀町の古代ゾウ発掘プロジェクト１件､滋賀県トンボ調査グループ１件という形で調査をしながら公表を行っております。

また、今週末にあります水田生物研究会が当館で開催する予定で、そちらのほうでも発表する予定で進めております。また、その研究を支えるために外部資金の導入ということで、科研費等のほか積極的に受託事業も受け、年間２６件を受けるという形で達成しております。

２ページ目をごらんください。３つ目の「新たな参加と発見できる博物館」、これを目指して国内外の博物館と活動連携を強化して行っております。

そのうちの１つは、広く一般の方々にも当館を利用していただけるよう、１階のアトリウム空間にあります新空間で、館外の方々に展示を行ってもらい、そこで交流を進めていただく窓口を開けております。年間１３件の利用ということで公開を進めております。その申込方法については、ウェブで申し込んでいただけるよう準備を進めております。

それから、国外につきましては、リニューアルでも関係してまいりますが、今年度バイカル湖の博物館との友好提携を行い、展示計画を進める上で生物を展示するという企画協力体制を今構築しているところです。

また、昨年度友好提携した湖南省の博物館については、今年度企画展示「魚米之郷」を開催いたしましたが、連携を図り、大変好評を得た企画展という形になりました。

次の３ページをごらんください。４つ目の「体験と交流を促す博物館」では地域、そして学校と博物館という形で体験や交流を進めていくことを基本にしております。当館では、学校利用を促進するためにサポートシートを開発しておりますが、特に今年度は企画展示で低学年、高学年というふうに分けて学習シートを作成し、より企画展示にもなじんでいただけるようなサポート体制をとりました。また、学校を中心とした地域活

動を支援するということで、サテライト博物館を行っており、今年度は長浜市の富永小学校、高月小学校等で実践をしております。

５つ目の「話と応援ができる博物館」では人と情報の交流を促進するもので、当館で目玉になっておりますフィールドレポーターさん、あるいははしかけさんといった方々の活動を支援するということで、いろいろな工夫をやっております。

一つは、フィールドレポーターさんとはしかけさんは、それぞれグループで活動されておりますけれども、お互いの情報を共有化することを進めさせていただいております。また、はしかけミーティングのほうでは、はしかけさんとして登録されている方で、１６ぐらいあるグループにまだ所属されていない方々を対象に新たな「はしかけ活動」を進めていきたいということで、どういった活動ができるか、今後の展示のリニューアルも含めながら検討するミーティングを今年度から開催して、いろんな意見交換を行っているところです。

また、次の４ページで書いてありますように、環境学習センターが当館では組織としてございまして、第四次環境総合計画に基づいて、環境とかかわることのできる人育て・人育ちを実践していくということで、環境学習センターが中心となって交流フェア「発見！びわ博フェスティバル」を９月に開催しております。

また、県内各地で「環境ほっとカフェ」等も実践し、人と情報の交流する場を提供しているところです。

また、今年度から新たに企業・大学との連携に力を注いでいるところです。今年度はコクヨ工業さん、日本生命さん等、それから大学のほうでは京都大学や関西大学等と連携を図った事業を進めているところです。

「博物館機能の強化」については、以上のようなことを、新たに今年度重点を置きながらやってきております。

お手元の資料５ページ目をごらんください。こちらは、もう１つのカテゴリーである「環境の整備」についてです。こちらのほうも４つの方針を立てております。まずは「拠点としての施設整備」ということで、開館して１８年になりますけれども、建物や設備の老朽化・劣化等によって、博物館としてのいい環境というのは保ちにくくなっております。特に収蔵庫空間につきましては、なかなか難しいところに迫られております。日常の保守点検の範囲内でＩＰＭを推進しながら、資料のよりよい環境づくりを行ってい

るところです。

特に県が主導する県有建物の長寿命化対策ということで、当館はその対象施設に選定されましたことから、ガイドラインに沿った計画を今後策定していくということになっております。これについては、今年度未達成の状態ですけれども、そういった指定を受けたことから、来年度以降、徐々に動いていくのではないかというふうに考えられます。

また「柔軟な運営組織」というところでは、今年度から準備室等にワーキンググループを設置して、技術職の職員等の配置も充実させていただくなど、第１期のリニューアルに向けて足元を固めております。

最終ページをごらんください。「社会的支援と新しい経営」ということで、当館は、先ほどから入館者数減にはなってはいますけれども、まだまだ近畿地方については知名度が低いと言われております。今年度から広報戦略的に強化をしたいということで進めております。まず、昨年度に広報戦略の策定を行い、それに従ってできるだけ知名度を上げることに実践していきたいということで、例えば道の駅等にポスターを張り出したり、ＪＲの駅に広告を出したりとか、そういったことをやってきております。

また、移動博物館事業を進めており、今年度も予定よりも２倍以上の回数を実施しているところです。

再来年のリニューアルオープンに向けて、広報戦略計画を策定し、その中の一つとして、県民とともにつくる機会ということの参加型展示も来年度以降実施しようと考えております。

リニューアルにしても、今後の運営に幅広い財源の確保が必要だということで、今年度から企業からの寄附金を積極的に呼び入れたいと動いております。今年度は既に２件の寄附をいただいております。

最後になりましたけれども、「存在基盤の確立」ということで、博物館運営をよりよいものにしていくために今回の協議会を開催させていただいております。この会議等でご意見をいただいたものを反映して、展示のリニューアルも含めて改善していきたいと考えております。

リニューアルに関する実施設計の策定については、素案ができておりますので、この後説明させていただきます。

ざっとですけれども、説明させていただきました。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

中長期計画の進捗状況について、ご説明いただきました。

あちこちに出てきましたリニューアルのことにつきましては、この後もう一つの議題のほうで予定されていますので、またそちらで突っ込んでいただいたらいいかなと思いますので、今期の活動全般にわたって、特に具体的に取り組んできたことを中心にご紹介いただきましたけども、皆さんのほうからご意見、あるいはご質問がありましたらどなたからでも結構ですので、ご発言いただきたいと思います。

限られた時間ですので、できるだけこの琵琶湖博物館にとって有益な、後々役に立つようなご意見を聞かせていただければというふうに思っております。別に結論を出すような会議でもありませんし、自分が言ったことが後々責任を持たんならんような会議でもありませんので、どうぞ言いたい放題、言っていただいたら結構かと思います。

いかがでしょうか。

別にこのペーパーに載っていることでなくても、今まで利用されたり、ごらんになったりしていて気のついたこと、何でも結構ですから。

○松江委員：よろしいですか。

○山西会長：はい、どうぞお願いします。

○松江委員：前回に引き続き、委員を担当させていただいております。よろしくお願いいたします。

これまでのご意見をいろいろと聞かせていただきまして、また発表もありました。いよいよ２０１６年のリニューアルオープンに向けてということですが、２０１６年といいましても、もうあと１年ちょっとということです。私の仕事柄の立場でいろいろ意見を述べさせていただいておりますけれども、先ほどご説明がありましたように、関西圏における知名度がいま一つというようなお話がございましたので、たびたびこの場でもお話ししておりますように、やはり事前の広報、ＰＲというのがそれなりに必要かというふうに感じます。

特に滋賀県内においては、地元の学校教育の一環として、いわゆる琵琶湖博物館を訪れた小・中学生とかが多分いらっしゃると思いますし、一度も行ったことがないという人は少ないと思うんですけれども、広く滋賀県外を見ると、まだ来たことがないという方々が多いと思います。

そういう意味では、いよいよリニューアルオープンするんだよということを含めて、来年度はそれの事前ＰＲの１年であるのではないかというふうに考えますので、当然、いろんな予算の問題とかあろうとは思いますけれども、いろんな角度でリニューアルに向けて準備を進めておるという、事前の準備段階も含めて、何か県外発信をするようなことが少しずつ少しずつで結構だと思いますけれども、１年間通して要るのではないかというふうに思いますので、そういった部分での何かアイデアとか、お考えがあればお聞かせいただきたいというふうに思っております。

○山西会長：リニューアル、事前のＰＲが重要ではないか、どういうことを考えているのかというご質問であります。

○事務局（山川課長）：貴重なご意見ありがとうございます。なかなか知名度が上がらないということで四苦八苦しております。せっかくのリニューアルですので、やはり皆さんとともにつくっていきたいというところもあります。

実は、「私の琵琶湖自慢」と題して、私はこの風景が好きよというような、そういった写真を募集し、それに思いを添えて応募いただいて、開館前にギャラリー展示で行うとともに、常設展示でもそれを見ることができるように、そういった展示をつくろうと、展示室とリンクをさせる話で今進めているところです。

○松江委員：それぐらいでしょうか。

○事務局（中鹿副館長）：問題意識は全く松江委員と一緒でして、要は県内だけじゃなくて、下流の京都、大阪、兵庫、このあたりの知名度をいかに上げるかということで、リニューアルの機にもう一度といいますか、そういった広報ＰＲをやっていきたいということで、来年度の予算要求に向けて、そういった経費も新たに現在要求をしております。

下流向けの広報予算ですとか、単にいわゆるメディアを使った広報だけじゃなくて、場合によっては大阪とか地域へ出かけて行って、それこそ交流しながら博物館のリニューアルなり、琵琶湖博物館の理念を理解してもらうと、いろんなことを少し工夫しながら、下流を中心にやっていきたいというふうに考えております。

次回、第２回目の協議会のときには、予算がうまくついておれば、またのそのあたりも紹介させていただきたいと思います。

○松江委員：以前もお話ししましたように、いわゆるプレスの部分で、各媒体に対するいろいろなアプローチというのは継続的にしていかないと、何かあったときにぽんと行っ

ても、なかなか取り上げてくれないということもございますので、先ほど言いましたように、リニューアルオープンはもうすぐだよということを継続的にしょっちゅう発信されると。

前も一度提案しましたが、県政記者クラブの皆さんに一度つどっていただいて、館を見ていただくとかいうようなことが必要だと思いますし、やはり媒体に対する発信力のある人たちに対するアプローチを常日ごろ持っていただいて、やっていただくということが非常に大事じゃないかと。私もその媒体側の一人としてそのように感じますし、ことしも折あらば取材ということで、無理を言うて取材を受けていただいたこともありましたけれども、何かのきっかけでそういうことが必要になってくると思います。お金をかけずにやる方法もあると思いますし、そういう部分ではできるだけ情報をオープンにしていただいて、集客を図るとかいうのが必要かと思います。

それと去年、ナイトミュージアム的な夜の見学みたいな、ああいうのは非常に目新しいものがあると思いますし、ぜひ継続してやっていただきたいなというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

広報の体制というのは、どういう体制をとられているんですか。

○事務局（中鹿副館長）：現在は企画調整課が所管をしておりまして、企画調整課の中に広報担当の職員がいるという形になってございます。

○山西会長：ぜひ体制も強化していただいて、広報ＰＲが重要であると、そういうご意見でしたと思います。

ほかにいかがでしょうか。

はい、中坊委員。

○中坊委員：初めてなので、何も言わんと帰ろうか思っていたんですけど。この６ページに「参加型展示」ということを書かれていますし、これは恐らく地域だれでも・どこでも博物館ということの重要なコンセプトの一つだと思うんですけども、具体的にどんなことをお考えでしょうか。

○山西会長：というご質問ですが。

○中坊委員：Ａ３の一番後ろ。

○山西会長：Ａ３の６ページ。

○水野委員：６ページの右上ですね。

○中坊委員：参加型展示での公募イベントだというような。

○水野委員：右上の達成状況。

○中坊委員：大事なことなんですけども、大変難しいことや思うんですね。

○事務局（山川課長）：はい。それが先ほど言っていた琵琶湖自慢という形で、自分の好きな琵琶湖の風景を紹介してもらうという、参加型のイベントと考えております。

○中坊委員：琵琶湖博物館でおやりになるというのは、展示の方法に泥臭過ぎるものは余り向かないと私は思うんです。かといって、制限し過ぎるとなかなか公募される方って少ないと思うんですね。私は大学博物館ですので、実は初期のころというのは研究分野の展示というので、いろんな部局の方に声をかけて、今何をやっているのかというのを、我々ではなくて、博物館の外でやっていただいていて、議論をしながらつくっていたことがあるんです。

滋賀県の琵琶湖博物館であれば、博物館以外、外の部分のところだと思うんですけども、いわゆる公募してこられる媒体をいかに発掘するかというのが大変重要になってくるのかなと。さっきおっしゃられた、いわゆるＰＲ、それも兼ねてちょっと本気で考えられたらおもしろいなと思うんです。

これは大変難しい問題だと思うんですね、本当にちゃちなものになってきますし。うちは、よく学生がポスター張りたいと言ってきて、やっているんですけど、見るも恥ずかしいようなものがありまして、枯れ木も山のにぎわいかなというのもありますけども、やっぱりリファインをする必要もありますし、そこがやっぱり琵琶湖博物館の重要な役割になるのかなと、これ大事な課題かなと私は思うんですけど。

○事務局（山川課長）：はい、ありがとうございます。

実際に公募を始めて、本当に応募してくれるのかなというところはやっぱりあります。どのぐらい集まるだろうと。そのギャラリー展を開催するに当たっても、広い企画展示室が埋まるのかどうかというところもあるんですけども。

○中坊委員：学校の生物クラブとかでもいいと思うんですよ。

○事務局（山川課長）：そうですね。

○中坊委員：本当に小さいとこでも、子どもたち、ぽんと。学会なんかでも高校生の展示とかいうのはちょっとトレンディになりつつありますので、その辺のところをぽんと何

か出してやることによって、参加できるというのを外の人に持っていってもらうのが大事かなと。

○事務局（山川課長）：そうですね。学校関係なんかに一本釣りじゃないですけど、お声をかけさせていただいて、クラスで出してもらうとか、そういったこともちょっと検討したいと思います。

○中坊委員：待っていても来ないと思いますよ。

○事務局（山川課長）：はい、ありがとうございます。

○山西会長：はい。貴重なアドバイスだと思います。打って出るということで、ぜひよろしくお願いします。

ほかの方。

はい、どうぞ。

○伴委員：毎年非常に努力されていて頭が下がる思いですけども、今の話で言うと、フェイスブックみたいなソーシャルネットワークというのを利用されているんでしたっけ。それをちょっとお聞きしたいのと、それから、これも毎年申し上げていて非常に恐縮ですけれども、ここは非常にアクセスが悪いということで、それを何とか改善して、一般の人がもっとここに訪れやすいようにするということが余り議論されていないのがちょっと不満なんですけれども、その２点についてお伺いしたいのです。

○事務局（山川課長）：１点目につきましては、実際今やっておりませんが、検討しておりまして、できれば今年度中に何とかフェイスブックをやっていけないかと、担当者のほうで計画を立てているところです。

もう１点のほうにつきましては。

○事務局（中鹿副館長）：公共交通機関の利便性の向上ということですけども、一時期、浜大津から船があったんですけども、それは採算性がとれないということで撤退して、バスも減便しているということで非常に悪いという状況になってございます。ただ、これにつきましては､なかなかバス会社も収益ということで非常にシビアにいきますので、現在の入館者数なり、現在の利用状況ではお願いしてもなかなか難しいということがございます。

まさに、このリニューアルを機に入館者数も増やし、そしていろんな公共交通機関、船あるいはバスの増便といったものを市なり地域と一緒になって、そのあたりの公共交

通機関の向上というものを働きかけていって、改善をしていきたいというふうに現在考えているところでございます。

○伴委員：それは今、何かアイデアがあるということはないのですか。

○事務局（中鹿副館長）：たちまちリニューアルの工事が来年度から始まりますので、再来年のリニューアルオープンに向けて、来年度になったら、できたら市とかバス会社さん、船会社さんが入って協議会というか、研究会的なもの、話し合いの場から持っていきたいというふうに考えています。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

なかなか難しい問題でもありますが。

ほかにいかがでしょうか。

はい、どうぞ。

○橋詰委員：４ページの、人と情報の交流を促進するために地域活動の活性化というふうになっていて、企業ともやっていきたいというのはすばらしいなと思っていたんですけども、この中に図書館というのは入ってないんでしょうか。

というのは、私は前に一度、ある図書館の協議会の協議員をさせていただいていたことがありまして、図書館へ、調べ学習で地域の小学生が急に来られてもなかなか資料が準備できない。そうすると、調べたいことが十分調べられないということで、結局、学校に帰ってパソコンで調べちゃうみたいな状況があるらしいのです。

でも、本当は活用の仕方というのは別にあって、事前に例えば１カ月ぐらい前に、こういう内容で調べたいというふうに学校から図書館に申し入れがあれば、県内いろんなところから資料を集めてくれるというシステムがあるらしいのですけど、それがなかなかわかっていただけていないという残念な現状があると伺いました。

私は観察会をやっているんですけれども、図書館で観察会をしてもらえませんかというお話もありまして、実際に図書館で何かを知るとか、調べるという意味では博物館と同じ内容なのかなと思うのです。図書館には図鑑なんかもたくさんあります。だけど、それを活用するということになったときに、実際の物の見方とか、もしかしたら図鑑の中のものがここの博物館に行けば見られるよということも含めて、滋賀県にすばらしい図書館がいっぱいあります。そこから、もっと実際のものを観るためにフィールドにいざなうということを博物館がしてくださるとか、あと、「こんな資料があるから、博物

館に」というふうな案内を図書館のほうでしていただけるというような連携がとれるといいなと思っています。

先ほどおっしゃった中で、生物クラブというお話がありましたが、美術系の大学なんかもおもしろいんじゃないかなと思います。それで賞は取れなくても、発表の場という意味では、すごくきれいな写真をいっぱい撮ってくれるかもしれませんし、そういう意味で、垣根がないと、また違うものができていいんじゃないかなと思います。

○山西会長：ありがとうございます。

大変貴重なご意見だと思います。図書館との連携というのは、今までどういうふうに検討されてきたんでしょうか。

○事務局（桝永）：実際やった例で、県立の図書館に私たちの学芸員が参りまして、移動博物館の一部だったんですけども、資料とともにお話をしてきたというのがあって、こちらの活動も図書館と層が違う方にお話ししたという事例があります。

今、委員が話されました、逆に向こうの方がこっちに来るのはしていないので、そういうのは可能性があるかなと思って話をお伺いいたしました。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

図書館のほうもいろいろと利用者増対策とか、悩みを持っておられるようですので、うまく響き合うところがあれば、ぜひ継続的にそういった連携事業をやっていかれるのもいいかなというふうに思います。

美術クラブへの働きかけというのは、今まではいかがですか。

○事務局（楠岡）：リニューアルの中でマイクロアクアリウムというのを計画しているんですけれど、その中で成安造形大と一緒になりまして、来年度、成安造形大の授業の一環として、学生さんにマイクロアクアリウムの中で使うシアターの椅子を、プランクトンをベースにオリジナルの椅子を制作していただくとか、あと壁画をつくっていただくとか、レリーフをつくっていただくというようなことを今計画しております。

○山西会長：ということですが、よろしいですか。

はい、どうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

はい、どうぞ、菊池委員。

○菊池委員：私も昨年に引き続きですけれども、やはり交通の利便性のことは毎回問題に

なってくる一方で、なかなか具体的なところが、という話は昨年も同じことが出ていたと思うんです。私も去年の意見とちょっとかぶるところがあるんですけれど、恐らく利便性が悪くても来たいと思えるだけのメリットがあるかどうかというところをしっかり出せるかどうかだと思うんです。

チラシを拝見しても、こういう施設があります以上の情報がないので、本当にここに来て楽しいのかどうか、１日過ごせるのかどうかというところを魅力的にアピールができていないというところがすごくもったいないなと思っています。恐らくリニューアルでもチラシをつくられると思うんですけれども、例えばきょうは１日博物館で過ごそうというアピールがあって、朝に入ってこんなことができて、お昼が食べられてというような１日のストーリーがあれば、１日かけてここは行く価値があるんだと思って来てくださると思うんですね。

なので、新しいものにお金をかけるのももちろん大事ですけど、既存のこういったツールを見直して、より魅力的にここに来てもらえるような書き方をするというところを検討するだけでも、集客効果としてはかなり変わってくるのではないかなというふうに思います。実は私の息子が４歳で、今、京都水族館にもはまって、毎回毎回行っているんですけれど、そういったところのポストに博物館のツールがあって、福井の恐竜博物館はすごくみんなとっていらっしゃるんですよ。やっぱり子どもの好きな恐竜の絵があって、絵だけでもそれをとってしまいたいという魅力があるというようなところで選ばれているような気がするのです。

博物館、水族館に来られている方は、恐らく琵琶湖博物館にも関心を持ってくださるポテンシャルの高いところだと思うので、そういったところにターゲットを絞って、お客さんがどういうツールだったらとってくれるのかというところを、リニューアルを機にしっかり考えられたらいいのではないかなというふうに思います。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

今のご意見に対して、いかがでしょうか。

○事務局（山川課長）：学芸の「芸」がなくて、なかなかいい発信ができていないというところが本当に耳の痛い話ですけども、実際、広報戦略を策定していく段階で、中の者がやはり自信を持って、こんなにおもしろいんだよと言える、そういったものは何だろうかと。もっと中の意識改革から始めないとまずいんじゃないと、そういった意見から、

売りを何とかつくりたいというところで議論をまだ進めている段階ではあります。

その中で、ポイントを押さえて、誰に向けて、どういう情報を与えるかというところで、例えばゴールデンウィークのときに京阪の方々に日帰りででも来てもらえるというようなところを考えて、例えば博物館だけど、水族館もあるよというところを押すために、日本最大のビワコオオナマズがいるよ、見られるよというような感じの宣伝を打つというようなことをしたりしていたんですけれども、なかなかうまくはいかない。

１回だけではないので、継続的にしていくということが大事かなというふうには考えております。やっぱりセンスの問題もありますので、そういったところをもっと中から磨いていくということが大事かなというふうに考えております。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

○津屋委員：津屋です。３期目を迎えさせていただき、ありがとうございます。

先ほどから広報戦略のところで、委員の先生方もすごく真剣にそこを訴えていらっしゃると思います。

実は私、１２月１０日から３日間、文化庁のミュージアム・マネジメントの研修会で、講師として京都大学総合博物館の大野館長も来ていただいて、東京国立博物館、京都博物館のさまざまな最先端の取り組み、またＣＭディレクターの方のお話から、いわゆる広報の部分とか、思った以上に博物館が外に向かって積極的に発信している姿を見まして、私も非常に感銘を受けて帰ってきました。そういう中で、先ほどおっしゃった、特に京都大学の博物館のほうでは、対話式の観客との取り組みも非常に積極的にされていて、かなり考えて戦略をされているなというところがあると。

今、幾つかの質問に対してお答えされているところで、こちらのほうは何となく煮え切ってない感じの印象を受けてしまうんです。例えば移動博物館について、これによると６ページですけれども、多くのニーズがあったというところまでの成果は出ているんです。これが、来年度、再来年度と、どういうふうになっていくかという期待をしたいところですが、実態のところで言いますと、私は、早速５月に琵琶湖博物館さんが人の集まるところにぜひとも出ていただいて、目立っていただきたいなと思って、びわ湖ホールのラ・フォル・ジュルネという世界的音楽祭で、昨年は４万人を集客したわけです。

その隣の子どもたちの体験ワークショップのところで、移動博物館に出ていただいたんですが、来年は出られないと。守山のルシオールのほうも１日２万人近くの人が来るんですけども、そこも出られない。移動博物館についてはクエスチョンですというお返事を現実にいただいていまして、一体何がどうなっているのか。特にラ・フォル・ジュルネですと、関西エリアからわっとお客さんが来られますので、そういう場で琵琶湖博物館が、それこそリニューアルしますというような宣伝をするにはもってこいの場所ですが、そこには出られないということで、そのスペースがほかのミュージアムに取られてしまう状況になっています。

ここで言っていいのかわからないですが、すごく好評な地域に出て行く、いわゆるすばらしい広報戦略の一つのツールだったと思うんですが、このあたり何か大変な課題が起きちゃっているんでしょうか。すみません、教えていただきたいと思います。

○事務局（山川課長）：はい、ご指摘ありがとうございます。

一つ、４月当初のほうはちょっと年度変わりもあるということで、なかなか体制に。

○津屋委員：日程は５月です。５月の上旬と中旬に全部なっていますので。

○事務局（山川課長）：はい。

もう一つの５月については、実は移動博物館をやって来年で丸３年やりましたけれども、移動博物館を開いても、そこで閉じてしまって、本館の琵琶湖博物館に来てもらえない。そこにつながらないという問題がありまして、回数は年間１８件、２０件近くやっておりますけれども、なかなか直結しない。二、三年でそんな結果を出すのはということはあるのですが、実際アンケートを取りましても、移動博物館で知ったというのはほとんどないです。

そういった状況もありまして、じゃ、ただやめるのかではなくて、より発展させたいと、来年度以降、一日、二日だけ行くようなイベントではなくて、２週間丸々行こうとか、大々的な活動の方針を変えようと、さらに発展形を模索しているというところです。

○津屋委員：すぐ入館者につながらないから動かないという考えでいくと、その辺は非常に難しいですね。外へのアプローチというのは、継続的にそういう場に出かけていくことに意味があるのかなと私は感じますけれども、中での評価がそういう評価で、意味がなかったということになっているのであれば、それは仕方ないなと思います。

○山西会長：今、かなり厳しいご意見だと思うんですが、館長なり副館長いかがですか。

○篠原館長：これは全体を見て、「ヒトと自然の博物館」なんかは、むしろ館外活動を入館者数と考えているという考え方もありますので、この考え方については意見の分かれるところだろうと思います。

ただ、こっちに引っ張ってこられないということが、本当にそれでいいのかということになると、二、三年の結果だけでそれがどうなるかわからないということがあります。私自身の個人的な考えで言えば、出て行くこと自身が博物館の活動だというふうに思っていますので、本当はそれもカウントしていくといいと思います。

ただ、実際にはその数字だけで評価するというのはどこでも同じで、それだけを言ってしまうと、ここに入ってくる入館者数だけが博物館の問題ということになってしまいます。

ですから、我々のほうは、地道な活動を続けていくことによって、そうではないんだよということを、それはいつかどこか閾値を超えて爆発的に増えてくる可能性だってないとは言えないわけです。

だから、即効的に人数が増えるという数字をどうしても見てしまうということはあるんではないかなというふうに思いますけれども、それは考えさせていただくということで、そういうものはいろいろほかにもいっぱいあるんですよ。

したがって、それは広報戦略全体のことを考えれば、もう少し地道な、今のところ何ともなくても続けていく努力をする必要はあるかもしれないというふうに、またその点については十分検討させていただきたいというふうに思います。

○津屋委員：前に、多分この議論結構したと思うんですよ。入館者だけを評価とするのか、例えばおっしゃるように、すごく外に頑張って出かけていらっしゃる、そこで出会った方の数は膨大だと思うんですね。その数が全然評価の数字にならないというのは、それはとても悲しいと思いますし、入館者とプラス参加者という点で、もう一つの数字も多分評価に値すると思うんですけど、会長、どうなんですか、入館者の数字しかだめでしょうか。

○山西会長：今、館長もおっしゃいましたし、やっぱり兵庫の「ひとはく」なんかは、そういうのをきちっとカウントしているという事例もありますし、アウトリーチというのは基本的にそういうことじゃないかと私も思いますので、評価のほうは、そういう視点でお願いできたらと思います。

○中坊委員：一言だけいいですか。

すごく大事なことで、誰も入らなければ全く意味がないんですけども、ある程度増えてきますと、今度また意地になって増やそうという傾向が出てきます。そうすると、やらんでもええことまでやって、本来の節を崩してまでやってしまうことがままあるんですね。そこはよく見きわめてもらって、琵琶湖博物館のコンセプトって木の根元に研究がありますので、これだけは絶対守ってほしいなと。

この参加型というのは、外からの参加という根に肥やしをやることをやってほしいなと。表面上の派手なことって限界がありますし、琵琶湖博物館は、最初入館者は多かったんですよね。当時、川那部先生が館長で、これは３年もったらええほうやということを言われて、私とこの大学博物館がオープンしたときにも、これ派手やけども、もうちょっとしたら古くなるよ。あんた、どんなふうに考えているのと、開館当日にそういうことをぼそっと言われて、全くそのとおりなので、来館者の数と博物館のコンセプト、ここの兼ね合いは大事です。

やっぱり華やかなことだけは見てほしくないなということは思います。これ、一歩間違ったら本当にパンダ小屋になってしまって、どうしようもない。継続性も何もなくなりますので、そこのところだけよく注意してほしいなと、これは希望ですね。

○山西会長：はい、その点はそのとおりだと思います。

両立するように、うまくバランスもとりながら、工夫もしながら。特に津屋委員のご指摘は、ビジネスチャンスを生かせているかという、そういう問いかけでもあると思いますので、そこら辺は嗅覚を働かせてということも必要かなと、私も思いました。

すみません、ちょっと時間が超過気味でして、この中長期計画につきまして、ほかにご意見がなければ次の議題に。

事務局、どうぞ。

○事務局（野村）：事務局のほうから失礼いたします。

本日、欠席されておられます山本委員様から、先ほどお電話がございまして、こういう意見がありますということを皆さんにお伝えくださいということを承りましたので、２点ほど報告させていただきます。

こちらの中長期の５ページになるわけですけれども、基本方針の拠点としての施設整備のところでご意見がございました。おっしゃっておられました内容につきましては、

例えば障害を持つ方が、博物館等施設内に来られたときに体調を崩すことがよくあるということで、今、多目的トイレなんかの整備は進んでいるんですけども、休憩できるようなベッドルームですとか、あるいはシャワールーム等の整備というふうな安全で快適な施設整備について、どういうふうに考えているかということをお聞きになっておられました。

もう１点は、この５ページのすぐ下、柔軟な運営組織というところで、職員が働きやすい博物館ということで、例えば障害者が職員になるということも想定されて、こういう計画はつくっておられますかというお尋ねがありました。

その２点のお問い合わせがありましたので、事務局のほうからご報告させていただきます。

以上です。

○山西会長：はい、２点のご質問があったということです。これに対しては、館のほうはどういう対応を考えられていますか。

○事務局（田中課長）：総務課でございます。

承りました意見につきましては、随時可能な限りさせていただきたいと考えております。ご指摘いただきましたとおり、休憩室ですとか、シャワールーム等につきましても、ご要望があるということは承っておりますが、限られたスペースの中での対応ということになりますので、その辺のところはリニューアルとあわせて考えさせていただきたいと思います。

職員につきましても、県のほうで障害者の方の雇用ということを進めておりますので、それにあわせた形で、当館のほうも取り組んでいきたいと考えております。

○山西会長：はい、ありがとうございます。

中長期計画につきまして。

はい、水野委員、お願いします。

○水野委員：すみません。それにあわせてなんですけれども、障害者さんのお手洗い以外にも、個室の授乳室というのをぜひ設けていただきたいなと思っていることと、現在あるエントランスのエレベーターですけど、一方方向でしか出入りができないので、車椅子さんが一人入ってしまうと出にくくなるとか、ベビーカーが入ると、こうしなくちゃいけないというのがあるので、あわせて、駅にあるように出口と入り口が違うものとか

を検討していただけたらなと思います。

○事務局（田中課長）：多分に構造的な問題がございますので、その辺のところは専門的に見てみないとわからない部分がありますので。

授乳室につきましては、現在入っていただきまして右手のほうのトイレの奥に休憩室のところにございまして、そちらのほうを活用いただいております。

○水野委員：扉を開けると、がばっと見えるので。

○事務局（田中課長）：その辺のところも、また随時工夫させていただきます。

○山西会長：よろしいですか。

はい、もう１点。

○水野委員：もう一つ、すみません。

４ページに、環境学習センターさんの達成状況、幼児を対象としたという記載があるんですけれども、幼児って幼稚園さんを大体対象としていると思うんですけれども、実際、１歳半ぐらいから幼稚園に上がるまでがとても動きやすいので、そこを対象としたものを何か考えていただきたいなと思います。

例えば子育て支援センター、市や県のほうと協力して何かしようとかという計画はないのでしょうか。また、子どもを１時間、２時間くらい預けて、お母さん方が展示を見に行けるような曜日、もしくは時間をつくろうというような計画等はないのでしょうか。

○事務局（桑原所長）：環境学習センターの桑原です。

まず、幼児を対象としたプログラムですけども、実は琵琶湖博物館の生活実験工房というのがあるんです。そこの畑や屋外の森とかを使った形で、これまでの実績からいくと、ゼロ歳児から５歳児ぐらいまで、要するに保育園に行くぐらいまでのお子さんと親御さんを対象に集まっていただいて、余り難しいことはできないんですけど、実際に博物館の畑とか森をめぐりながら自然を体験してもらうというような形でプログラムを組んでおります。今年度で言うと４、５、６で、夏場は時間がとれなくてやらなかったんですけども、秋は１０月から毎月１回だけ実施しております。

おっしゃるように小さいお子さんをお持ちのお母さん、お父さん、またその方々が集まって、いろんな活動をできる場というのはなかなかないという状況でして、それを博物館の施設をうまく利用しながら、そういう人らにも参加していただけるようなプログラムということで今実施しているところです。

実は先週、１１月９日に今年度の第５回目を実施したんですけども、そのときは１６組で３９名の参加がありました。うちで実施するにはスペース、あるいは人的関係でちょっと多いかなとは思ったんですけども、意外と口コミで広がっていって、リピーターとして参加していただく方、またその参加した方から聞いていただいて新しく加わっていただくと、だんだん、だんだん輪が広がっているというのが現状です。

あと、お子さんを預かってということですけども、残念ながらうちはそういう仕組みが今のところできておりません。この辺はまた今後検討していく課題になるかなというふうに思っております。

以上でよろしかったでしょうか。

〇水野委員：ありがとうございます。

〇山西会長：はい、どうぞ。

〇中田委員：中田です。私は前回も参加させていただいて今回２期目ですけども、私の言うことは､今おつき合いしている方たちが割と年齢の高い層となってしまっているので、どうもそちらのほうに視線が行ってしまうんです。

さっきの広報の問題について考えると、お電話で言われた山本さんのように障害者の方の目線から、そして水野さんのように小さいお子さんを抱えている年代（の目線）とか、また私のような年齢の高い者からの目線というふうに、それぞれのターゲットの仕方が違うんですよね。そしてまた、企画展示とかでも、ある程度の年代のコンセプトとか、そういうものを入れながらでないと、ただ単にばらばらっとやっていてはつかみにくいのかなと思うんです。

あと、（琵琶湖博物館があまり）知られていないということでも、実は私の親戚の者が京都におりますけれども､老人会なんかでバスツアーをよくするんですよね｡それで、今回ここの琵琶湖博物館に下見に来させてもらったということで、すごくいい博物館があるのやと言って、感激して、私のところへ電話をかけてくるんですよ。実は滋賀県でどこへ行ったらいいのかということで、こんなとこ、こんなとこと、ここの話もしておいたので、下見に来てくれたらしのです。それで、あそこやったらいいなと言って、お年寄りでも、お年寄りといっても若い方も多いらしくて、ここなんかぴったりやし、１日建物の中にいられるということで、ぜひ連れてくるという話になっていたのです。

そういう形での目線も、何か中長期計画のほうに、こういう人をターゲットにする、

こういう人をターゲットにするということを明確にある程度出していただけたらいいんじゃないかなと思います。

すみません。これは私の勝手な意見ですが、お願いします。

○山西会長：ありがとうございます。

ターゲットを明確にして、そのターゲットごとに広報戦略を打ち立てるという、大事なことですね。よろしくお願いします。

○中田委員：ごめんなさい、もう一つです。

これも私の体験ですが、やっぱりそういうバス旅行を企画しまして奈良のほうへ行ったときに、私は歴史が好きなので、その団体を「近つ飛鳥博物館」に連れて行ったんです。そうしたら、いつもそのバスでお世話になっている営業の方がついてきていたんです。実は、ここは知らなかったと。こういうところに来るのもいいもんやなということで、詳しくそこの博物館の方に聞いたりしていらしたのです。

そういう営業の方をターゲットにすると、団体のバスで来ますので大勢の集客がある程度見込めますし、貸切バスで動くということなので、バス会社とかクラブツーリズムとか、あそこなんかも目的別にツアーをつくるらしいので、こういうところへ行くツアーなんかも企画してくれると思うんですよね。そういうところも一つターゲットにして、ぜひ広報していただきたいと思います。

○山西会長：大変いいアイデアだと思います。ぜひご検討をお願いします。

すみません。それでは、次の議題に移らせていただいてよろしいでしょうか。

（３）新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について

○山西会長：それでは、議題３、新琵琶湖博物館の創造についてということで、リニューアルの話になるんだと思います。事務局からご説明をお願いします。

○事務局（藤村室長）：準備室の藤村と申します。よろしくお願いします。それでは、座って説明させていただきます。

琵琶湖博物館のリニューアルにつきましては、今回第１期の実施設計の素案ということでまとまりましたので、ご報告をさせていただきます。第１期では、現在の環境を扱うＣ展示室と水族展示、この２つをリニューアルしようということを考えております。資料は、第１期実施設計素案の説明書、表紙に写真のついているもの、それと図面編、

この２種類がございますので、よろしくお願いします。

まず、写真のついているほう、こちらの１ページをごらんいただきたいと思います。１ページに、３期にわたるリニューアル全体の新展示の考え方と特徴が書かれております。新しい展示の考え方は、「湖と人間の未来を考える」でありまして、自然や人々の暮らしの変化、そのつながりを伝え、琵琶湖の過去から今、そして未来を考える多様な視点を提示いたします。

現在の私たちの環境や暮らしを捉え直すために、カラーで印刷されていますが、３つの異なる時間スケールを設定いたします。

まず、Ａ展示室は、数百万年から数十万年という、そうした長い時間に立って初めて見えてくる自然の変化やつながりを見せていきます。

Ｂ展示室は、人が琵琶湖で暮らすようになった１万数千年から数百年という時間スケールで、身近な自然の変化や人々のかかわりの歴史を扱います。

Ｃ展示の水族では、数十年という非常に短い時間スケールの中で、特に高度経済成長以降に起こった重要な変化を紹介することで、現在を捉え直し、未来を考える展示といたします。

新しい展示では、過去、現在、展示内容と来館者のつながりを伝えることに重点を置きまして、さまざまな環境、生き物、人間活動の関係性をわかりやすく展示し、自分とのかかわりに気づくことができる展示というふうに考えております。

（２）新展示の特徴にも書いておりますけども、体感できる展示、驚きと感動、学びと発見の機会に満ちた発信力の高い展示としていきたいと思います。特にタイムリーでわかりやすい展示に努め、また地域で活動する人々や学芸員と語り合うことのできる交流スポットなどを展示室に設けて、多様な人々が集うにぎわいのある展示室としたいという思いを持っております。

次に２ページをごらんください。こちらから今回リニューアルを行うＣ展示室について書かれております。新しいテーマ、琵琶湖地域の今、身の回りの環境と暮らし再発見でありまして、琵琶湖岸から森林まで身近な環境を入り口に、環境、人間、生き物の関係をわかりやすく紹介をしています。

ここに新しい展示の流れが中段に書かれておりますが、図面編とあわせてごらんいただくとわかりやすいと思いますので、図面編の２ページ、折り込みで開いていただくと、

Ａ３の大きな図面が出てきますが、これを見ていただきたいと思います。これはＣ展示室のゾーニング図です。

新しい展示は７つのコーナーから構成されています。

まず、導入として、１「琵琶湖へ出かけよう」がございます。そして、琵琶湖から山へとさかのぼっていくように２のヨシ原、３の田んぼ、４の川から森へと上流に進んで行きます。それぞれの環境や生き物、そして私たちの暮らしとのかかわりを紹介していきたいと思います。

そして、５「私たちの暮らし」では、昭和３０年代の農家の暮らしから物質循環や資源循環の仕組みや知恵を紹介いたします。

最後に中央部に進みまして、数多くの標本を展示する「生き物コレクション」、最新の調査・研究成果を発信する「これからの琵琶湖」というような形になります。

図面編の３ページと４ページをお開きください。ちょっと幅をとりますけども、両方開けていただくとわかりやすいかなと思います。

３ページの左下の１「琵琶湖へ出かけよう」は、Ｃ展示室の全体の導入となる部分でして、琵琶湖についての紹介を行います。このコーナーでは、琵琶湖とその環境についてさまざまな情報を提供いたします。また、県外などの、琵琶湖についてほとんど知らない方には、琵琶湖の魅力を伝え、観光への入り口の役割も果たしていくと、そうしたものです。

４ページの左上を見ていただきますと、イメージイラストがあります、「琵琶湖へ出かけよう」。これは先ほどから紹介をしております、県民から集めた琵琶湖のお気に入りの写真をこうした形で展示をし、情報も検索できるようにして、琵琶湖への関心を高め、実際に現場を訪れていただけるような仕掛けもしていきたいなと思っております。

次のコーナー、２「ヨシ原を歩いてみると」では、琵琶湖の湖辺の代表的な景観であるヨシ原を取り上げます。ヨシ帯が生き物にとって重要な環境であることや、ヨシの利活用についても、ここでは紹介をいたします。

４ページの左の中ほどにイメージイラストがありますが、臨場感あふれるヨシのジオラマを設置いたしまして、左側が夏のヨシ帯で生き物とのかかわりを、そして右側は冬のヨシで主にその利活用を紹介し、ヨシの選別であるとか、縄結びなどの作業を体験できるようなコーナーも設けることになっております。

次のコーナー、「田んぼをのぞいてみると」では、田んぼの多様な生き物と、それを育んできた独特の環境や人とのかかわりを紹介しています。

４ページに、またイメージイラストがあります。３「田んぼをのぞいてみると」の左下ですが、これは６月上旬の田んぼをイメージしておりまして、無数の生物がうごめいている状況を、来館者がカエルぐらいの大きさになるために２０倍のスケールのジオラマで表現をしていきます。

次に４のコーナーに進みまして、「川から森へ」というコーナーですが、ここでは琵琶湖の中・上流の環境と、そこに住む生き物と人とのかかわりを紹介しています。また琵琶湖集水域の治水・利水の取り組みについてもあわせて紹介をします。

４ページにもイメージイラストがありますが、上段の真ん中、川から森への部分です。大きな木のジオラマを配置しまして、森と生き物と人との関係、例えばカワウやシカなどの獣害も取り上げて、現在の森の問題について考えてもらうような展示にもなります。

これらの展示室には交流スポットを設けます。３ページの鳥瞰図を見ていただきますと、例えば２「ヨシ原を歩いてみると」のところで、白の字に交流スポットがありますし、田んぼのコーナーでも交流スポットがありますし、次の川から森の出口も交流スポットがあります。こうした交流スポットを設けて、地域の人々の活動の展示であるとか、来館者との交流を促進して、賑わいのある展示室にしていきたいなという思いを持っております。

こうした一通り琵琶湖から水源の森である山まで、それぞれのつながりを見ていただきまして、５「私たちの暮らし」という、そのコーナーに進みます。昭和３０年代の古民家である冨江家の展示をそのまま活用することといたしまして、自然循環の仕組みや知恵を紹介します。そして、現在の暮らしと、かつての暮らしを対照的に見せることによって、来館者が自分の未来の暮らし、そして琵琶湖について考える機会を提供していきます。

最後にこの真ん中の円形の部分に進んで、６「生き物コレクション」、７「これからの琵琶湖」ということになります。

６「生き物コレクション」では、琵琶湖博物館が開館以来１８年間収集してきた数多くの標本をこちらに展示をいたします。４ページの右上にイメージの絵がありますが、琵琶湖の固有種を初め、琵琶湖とその集水域に生息する多様な生き物を紹介します。例

えば、滋賀県が日本有数のトンボの生息地であることや、外来種が増えてきたこと、またそうした中でも多くの在来種が外来種と同じ場所で生活しているということなども紹介します。また、一部の展示を一定期間ごとに更新し、例えば生物の変異であるとか、美しい色彩､おもしろい形､絶滅が危惧されている生き物といったようなトピック展示、こうしたコーナーも設けます。

７「これからの琵琶湖」は、４ページの右下にイメージ写真がありますが、最新の研究成果を毎年更新しながら紹介し、また来館者と学芸員が交流できるコーナーを設けまして、来館者の質問や感想などＩＣＴ（情報通信技術）を活用し、双方向でやりとりができるような展示、そうしたものも目指します。

資料としては６ページ以降、今説明をした立面図がついておりますが、時間の関係で省略させていただきます。

次に、１４ページから水族展示が始まります。説明書のほうは４ページというふうになります。そちらをお願いします。

新しい展示のテーマは４ページに書かれておりますが、「琵琶湖地域のいま～水中の生き物と私たち～」で、これまでの展示と異なりまして、２点、大きな特徴があります。まず１点目は、生き物と人のかかわりを水族展示で伝えていく。単に生きた魚を見せるのではなく、生き物と人とのかかわりを伝えていくというのが１点目。もう一つは、生き物のいきいきとした生態を紹介すると、この２点が今回新たな取り組みとなります。

展示の流れとしては、中段に書かれておりますが、図面編を見ていただくほうがわかりやすいと思いますので､図面編の１５ページ､これもまたＡ３で折り込んでいますが、開けていただきますとゾーニング図がございます。

まず、１「琵琶湖の生き物とその環境」では、琵琶湖の沿岸帯、沖合、岩礁帯などのさまざまな生息環境と、そこにすむ生き物を紹介します。

２「琵琶湖の生き物と人の暮らし」では、生き物と人のかかわりを紹介します。

３「川の生き物とその環境」では、今度は川のほうでして、川の下流から中流、上流へとさかのぼっていって、それぞれの環境と、そこにすむ生き物を紹介します。

４「水辺の鳥たち」、５「よみがえれ！！日本の淡水魚」と続きまして、６「古代湖の世界」、これらは今回新たにつくっていく展示になります。

そして、７「生きた化石　古代魚」、８「ふれあい体験室」と続きまして、９「マイ

クロアクアリウム」、これらも今回新たに設置をする展示となります。

図面編の見開きの１６ページ、１７ページ、こちらもあわせてごらんをいただきたいと思います。

最初のコーナーであります、１「琵琶湖の生き物とその環境」で、１６ページの左上にイメージイラストがありますが、これは内湖、ヨシ帯を再現し、ヨシの中を行き来する魚たちのいきいきとした生態を展示していくということになります。図面編でいきますと、１７ページの平面図の左側の入り口を入った、最初の水槽になります。

また、１６ページ左下のイメージ写真を見ていただきたいんです。これは現在のトンネル水槽ですね。演出照明によりまして沖合の雰囲気を出しまして、また水槽を低温化することによって美しく銀色に育ったビワマスも、こちらでは展示をしていきたいなというふうに思います。

３「川の生き物とその環境」では、１６ページの右上にイラストがあります。下流域の川を再現いたしまして、水槽に魚を捕獲する「カットリヤナ」を設置し、簗を上がろうとする魚の行動を再現して、展示をしていきたいと。また、季節展示になりますが、川に遡上し産卵を行う魚と、その産卵行動についても展示をいたします。これが成功すれば、恐らく日本の水族館で初めてになるのかなというふうに思います。なかなか技術的に難しい問題もあって、現在検討しております。

次に、１７ページ、６「古代湖の世界」です。ここは今回新設をするコーナーです。世界一古い歴史を持つバイカル湖やアフリカの古代湖の固有種と人とのかかわりを展示し、古代湖としての琵琶湖の価値を再発信していきたいということで、図面編に戻っていただいて１４ページ、水族展示の表紙の部分ですが、下半分がバイカル湖の固有種になります。バイカルアザラシ、右の黄色いのがヨコエビ、そして左下がサケ科の魚、オムリです。そうしたものを今回、この「古代湖の世界」で常設展示としていきたいというように思っております。

また、１６ページのほうに戻っていただきますと、最後に「マイクロアクアリウム」というものを新設いたします。１７ページの平面図で言うと、左下のほうの小さい円形の部分、そちらになります。琵琶湖の生態系を根底で支えているプランクトンなどの小さな生き物、これに焦点を当てて、顕微鏡や映像を使って紹介をしていくコーナーです。先ほど楠岡のほうから紹介がありましたが、成安造形大学とのコラボレーションで、例

えばこの写真にあります、中央のほうにおばけのような模型があります。これノロミジンコですけども、そうしたものも成安造形大学とのコラボで、造形物をつくっていきたいというように思っております。

あと、資料としては１８ページ以降、今お話をした立面図がついております。これは省略させていただきます。

最後ですが、今回リニューアル、特に水族展示のリニューアルをすることに伴って、水槽等もいらいますし、ポンプ等も更新をしていくということで、施設設備の更新ということで資料をつけさせていただきました。照明器具も、ＬＥＤ等を使うことによって省エネ化も図っていきたいなと思っております。

最後に、説明書の８ページ、Ａ４の８ページをごらんください。全体スケジュールですが、リニューアルは３期に分けて段階的に実施をすることとしております。第１期では、今説明をいたしましたＣ展示室と水族展示を行います。第２期では、大人のディスカバリーや樹冠トレイル、レストラン、ショップなどの交流空間。３期では、残るＡ展示室、Ｂ展示室を行います。リニューアル全体を通じた事業費の規模が３０億円規模と考えておりまして、最終的には６０万人の来館者数を目標としております。

９ページに、第１期のスケジュールがございますが、水族展示は夏休みが終了した平成２７年９月から閉館、そしてＣ展示室は１１月から閉館ということでリニューアル工事に入りまして、ともに平成２８年度の夏休み前の７月中旬オープンを目指して計画を進めたいというふうに考えています。

以上でございます。

○山西会長：ありがとうございます。

基本計画、基本設計については、もう今までの協議会でも議論がされてきたことと思います。いよいよ実施設計が図面として姿をあらわしたということで今ご説明いただいたわけですけども、残された時間も余り多くありませんが、これに対しての皆さんのご質問、ご意見をお願いしたいと思います。

はい、どうぞ。

○津屋委員：リニューアルの計画が絶妙な日程になっているんですが、例えばオリンピックの２０２０年を意識して、最終段階に向かうとか、何かあったんでしょうか。

実は先日の東京の会議で、日本で世界博物館大会が一度も開かれていないということ

で、いよいよその申請を出すという決意が表明されました。取れたら２０１９年ですね。このリニューアルの第２期ができたころに、世界博物館大会が初めて日本で、それも関西ということで申請していこうと。落選するかもしれませんが、でも、そういう世界的な大きな動きの中で、このリニューアルのタイミングが絶妙にかかっているのです。これは、考えてこうなったのか、自然にこうなったのかと。

そういった中で、この施設のリニューアルのところについては、すごい資料を見せていただいて、練りに練られていらっしゃると思うんです。実は、先回の会議の中でも非常におもしろいことをされていて、美術館のオープンスペースを入ったところでコンサートをされるとか、レストランで、シェフの人に来ていただいてフルコースでやってみたら、満員御礼だったと。

まさにそういった博物館、これはユニークメニューというところに入っていくのか、いわゆるコンベンションで、もっと施設の中を使えないかとか、そういった意味の多様な主体との連携の中で、企業との連携というのが結構書いてあるんです。より積極的に言うと、民間の企業と博物館とがこの琵琶湖博物館で何かやること、そこに価値を感じるという形のユニークメニューについては、今すごく盛んに動かれて、また大きなお金を動かされて収益が上がるというところもあるんです。

改めて琵琶湖博物館って施設内外ともすばらしい空間で、いろんな使い方の可能性があるということも一定、ここで積極的にＰＲしていいんじゃないかなと。中身もすごいけども、全体ロケーション、琵琶湖に隣接した文化施設というのは本当にすごいことだと思うんです。

そういった意味で、すごいタイミングだなという驚きと、あんなにすてきな動きをされていたことが、なかなかこの中に見えてこないので、そこはさらに積極的にいろいろと考えていかれるのかなという２点です。

○事務局（藤村室長）：はい、ありがとうございます。

東京オリンピックとのタイミングですが、これは考えていたわけではなく、こちらの３期のスケジュールをなるべく短縮して、むだのないようにしたのが平成３２年の完成ということで、たまたま東京オリンピックが決定したと。これは我々として絶好のチャンスですし、グランドオープンのときに海外からも非常に多くのお客さんが来るということで、県ではそうした人たちを取り込むために観光的なこともいろいろと考えていま

すので、その辺と連携をして、ぜひともやっていきたいなと思っております。

それから、博物館の多様な活用というお話がありました。我々もいろいろ模索をしておりまして、今度も、アトリウムコンサートというものもやっていきます。海外の博物館なんかは結婚式にホールを貸すとか、そういった例もあるんですが、今、計画をしているのは、どこまで実現できるかはわからないんですけども、例えば企業との連携ということで、企画展示室で企業のＣＳＲ活動を紹介していくと、琵琶湖博物館からの発信という位置づけで企業とタイアップができないかなというようなことも考えておりますので、またいろいろとアイデア等のご指導をいただきたいと思います。

○山西会長：ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○北島委員：学校教育の立場から少しお話しさせていただきます。前年度から引き続き委員をさせていただいて、本校の学区に琵琶湖博物館さんがあるので、いつも子どもたちが寄せていただくとか、実際に学芸員さんとかが学校に来ていただいて、教育普及活動も含めて、いろいろ支援いただいていることに感謝をまず申し上げたいと思っております。

また、今年度来館者が増えるというところで、１０月に行われました県の小学校校長会の研修会のときに、時間をとってくださってお話しいただいたというのは、やっぱり学校も活用させていただいていますけども、より広くということで積極的に広報等お取り組みされているんだなということを思いました。

特に、滋賀県はどんどん若い教員が増えています。小学校でいくと、毎年２００人ぐらいが採用されているんですけども、そういう年代はよく考えると、全て滋賀県出身ではないんですが、もう１８年たっているので、その先生方は琵琶湖博物館に来た人が多いのかなということを思っています。実際に体感した教員がここに来て、いろいろ学習を深めるというのはすごく大切なことと思っていますし、今ご説明いただいた展示等のお話しいただくとか、資料を見せていただくと、本当にわくわくするような展示をされているなということを思いました。

その中で、学校としては、どういう教科であるとか総合的な学習の時間で使えるか、また、そのカリキュラムに沿ったプログラムであるとか、来たら、こういう学習ができますよというのが何かあると、なかなか教員は忙しいので、そういうのがビジュアル化

とかできると、すごくいいと考えています。企業さんとかでは、この時間だったら４５分間で、こういうカリキュラムとかができますよというのがあるので、そういう開発をしていただけるとすごくありがたいです。

また、展示の中で、いわゆる暮らしであるとか環境であるとか、私自身も滋賀県に来て初めて淡水真珠があるということを知ったんですけども、実は私の学区のところでは、その淡水真珠をもう一度復活しようとされているので、その貝を入れることによってすごく浄化されるということも含めて、そういうことができたりとか、二ゴロブナを放流できる場があったりとか、年間通じてはできないけど、そういう体験もあっていいのかなということを思いました。

あと、私が勤務している草津市では、この２学期から学校にタブレットが配られておりますので、今おっしゃってくださったＩＣＴ、子どもたちが１人ずつ持っているタブレットとつなげられて何か学習が深められるといいかなと、そういうアプリであるとか、いろんな学習、これからどんどん普及していくと思いますので、何かそういうことができるといいかなということを思いました。

また、集客ということで、琵琶湖博物館という点じゃなくて、湖南地域を面で見ていくと、きょうオープンした近くの施設があるので、そこは明るい廃墟とかいってネットでは全国的に広がっていますけども、何かそこと連携できるとおもしろいです。そこには常設じゃないけど、ちょっとした水族館みたいなのがあって、本物はこっちで見られるよみたいなのがあると、近いので流れとしてはいいのかなということを思いました。

思いつきだけで申しわけないんですが、そういうことがいろいろ考えられて、より楽しい水族館になるといいかなということを思いました。

○山西会長：いろいろアイデアを言っていただきまして、ありがとうございます。

ほかの方、いかがでしょうか。

はい。

○廣畑委員：すみません。皆さんのいろんなご意見や、博物館がどういうことを考えておられるのかという意見も伺わせていただいたんですけど、最初に組織の話というのがまずあったんですね。どういう考えを持って、どういうふうに進めていきます。という話もあったんですけど、どこでもそうですけど、組織というのは当然職制があって、職制に対して、どういうふうに個々に役割を持って動くかというのがあるんです。

一方で、今回リニューアル準備室を起こしておられるように、タスクフォースで動いていかないといけない部分というのが、何か特別なミッションが出てきたときに当然必要になってくると思うんですよね。このタスクフォースで動かしていくべきグルーピングというのをいかにうまくつくるかというので、その後の結果は大きく変わってくるというふうに私たちは思っているんです。

ですから、１回つくったグループだから、このグループで何が何でもリニューアルをやり切るみたいな発想は捨てていただいて、どんどん、どんどん事態が進展していくにしたがって、そのタスクフォースの部分というのは、組み合わせをどんどん、どんどん変えていっていただく柔軟性を持っていただいて、進めていっていただけるようにしていただきたいなというのが一番ベースになる部分で、ぜひお願いしたいというふうに思うところです。

あと、いろんなアイデアを委員の皆さん方が出されていたんですけど、この博物館としてもいろんな周りの情報を集める努力というのは、もっともっとしていただかないといけないだろうなと感じながら、ご意見を伺っていました。このリューアルが完成をしていくときというのは、恐らくご当地の草津市には滋賀県内で初めての「連節バス」も導入されると思います。

草津駅の西口からここまでだったら交通アクセスの問題とかいろいろありましたけど、本当にたくさん集客をして、年間６０万人もの人が入ってもらえるんだということになれば、その方々を観光バスとかマイカーで呼び寄せるということだけでは限界があると思うんですね。絶対、公共交通機関が必要になってくる。公共交通機関が必要になるのであれば、そういった目玉的な乗り物も使わせてもらえるようなことを考えていく必要があるんじゃないかなと思うんです。

草津市は、南草津駅の今の混雑緩和のためにバス会社から連節バスを借りて試験運行なんかもされています。どうせ増便を図ってもらえるんだったら、そういうバスを回してもらえるように働きかけをしていただくだとか、そんなことなんか、どんどんといろいろアイデアを考えてやっていけばいいのかなというふうに思います。

○山西会長：貴重なアドバイス、ありがとうございます。

はい、ほかの方いかが。

どうぞ。

○水野委員：展示についてですけれども、順路がしっかり決まっていて、Ｃ展示室については１から７まで順番に見ていくような形にはなっているんですけれども、来館する側に立ってみると、順路は博物館側が決めた順路であって、見る側にすれば、あっ、田んぼを先に見たいとか、町家を見てみたいとか、昔の家のほうが見たいとか、子どもとかもそうですね。

最初は集中力があるので、まずそこに行きたいなと思ったときに行けるような通路の説明があったらいいなと思うんですけれども、それについて展示案内図というようなことをお考えでしょうか。例えば、リーフレット等には載るとは思うんですけれども、実際、館内を歩いていって、Ｃ展示室まで行き着くにはたくさんの展示室を通っていくので、きっとリーフレットはバッグの中に押し込まれていると思うのです。

そこについて、あっ、ここは先に行きたいと思えるような案内図等々、もちろん邪魔にならないような案内図をお考えになっているのかなと思うんですけど、その辺はいかがでしょうか。

○事務局（亀田）：ありがとうございます。

Ｃ展示室は、これまでは割と自由にどこからでも見られるような構造になっていまして、それが結果として動線がわかりにくいですとか、最後のほうの展示を全部見ないで先に水族展示に行ってしまわれる方が多かったということがありました。そこで今回の展示では、まずは琵琶湖を見ていただいて、そこから川をさかのぼっていくような形で琵琶湖からその周辺の地域のことを見ていただくという流れになっています。おっしゃる通り、以前と比べるとかなり動線がはっきりした展示になる部分はあるかなと思っています。

見たいところに先に行きたいということでいきますと、緊急避難経路ということも含め、「生き物コレクション」の展示の間が空いているところがあります。あと、行きたいところに行くというのとはちょっと違うかもしれないんですけれども、来館された方が、今自分はどこにいるのかというのがわかるような仕組みをこれからもう少し検討しないといけないなと思っています。

例えば琵琶湖からさかのぼった所では、今自分はヨシ原というところにいるんだということがわかるようなサインなり仕掛けなり、あるいはリーフレットみたいなものですとか、いろんな形で今いる場所がわかりやすくなるような仕組みを作っていきたいと思

っています。

具体的にはなかなか詰め切れていない部分もあるんですけれども、工夫をしながら、行きたい場所にはどういうふうに行ったらいけるのかということもわかるような展示を検討していきたいと思います。

どうもありがとうございました。

○水野委員：楽しみにしています。

○山西会長：自由動線への配慮ということで、よろしくお願いしたいと思います。

時間が過ぎてしまいまして、これは私の責任やとは思ってないんですけども、きょうは始まりが遅かったということもあって、余り延ばすわけにもいかないかと思うんですが、ぜひこれはというご意見がございましたら、お一人か二人か。

展示リニューアルにつきまして、よろしいですか。

○事務局（野村）：申しわけございません。

山本委員から、こちらのリニューアルに関しまして４点の質問と、あと１点、ご感想がございましたので、ちょっと報告させていただきます。

まず、質問でございますが、説明書の２ページの真ん中のところに【展示の流れ】というのがございまして、そこの左側に１、２、３、４とあって、２番「ヨシ原を歩いてみると」、３番「田んぼをのぞいてみると」という表現があるんです。例えば障害者の視点に立って「ヨシ原に行ってみると」とか、あるいは「田んぼを感じてみると」といった表現は検討できないのかというご発言がございました。これが１点目でございます。

２点目は、５ページの一番下、⑨「マイクロアクアリウム」のところで「肉眼では見えないプランクトンなどの微小な生き物を顕微鏡や映像を用いて紹介し」とあるんですけれども、ここのところで、音声紹介がされるのかどうか教えてくださいということをお尋ねでした。

３点目は、６ページの中ほど、④「ユニバーサルデザイン」についての記載がございます。その１行目のところ、「あらゆる利用者を想定し」という表現があるんですけれども、あらゆるというところは全ての人とは言わないけれども、どのくらいの範囲を想定されて書かれているのでしょうかというお尋ねがございました。

質問の最後ですけれども、この８ページの真ん中、第２期の横のところに樹冠トレイルが書いてあるんですけれども、あらゆる人のことが想定されているのであれば、この

樹冠トレイルについても車椅子とか、ストレッチャーの方が来られても対応できるのでしょうか。どのぐらいの障害を持っている人まで対応していただけるのかといった４つの質問がございました。

あと、感想もおっしゃっておられまして、別冊の図面編のほうを山本委員が読まれて、大変見やすかったということをおっしゃっておられました。特に３２ページの９－４ということで、マイクロワールドシアターのところが、スクリーンの目線などがすごく理解しやすかったという意見を頂戴しております。

事務局からは以上でございます。どうも失礼しました。

○山西会長：はい、山本委員のご指摘が幾つかありましたが、館のほうからの回答というのはございますか。

○事務局（藤村室長）：まず１点目の障害者の視点から。例えば「歩いてみると」を「行ってみると」、「のぞいてみると」を「感じてみると」という非常に大切な視点だというふうに思いますので、これは検討させていただきたいと思います。

マイクロアクアリウムの音声紹介にいく前に、３点目のユニバーサルデザインの関係でございますが、表現としては、あらゆる人たちにとって使いやすいという、そういった表現を書いておりますが、ここではまさしく「あらゆる」を目指していきたいと思っております。例えば妊婦さんであったり、外国人であったり、そうした人たちも想定をして、段差であったり、多言語表記であったり、色彩、文字の大きさ、ピクトグラムと、こうしたものを考えていきたいということで、現在こうしたＵＤの関係ではＵＤ評価も２回しておりますし、あともう１回計画をしております。また、こうしたＵＤ関係のワーキングも立ち上げて検討をしておりますということで、ご報告をさせていただきます。

マイクロアクアリウムの音声紹介と樹冠トレイルのアクセスについては、担当のほうからお答えをしてもらったほうがよいと。

○事務局（楠岡）：マイクロアクアリウムのほうですけれど、目の不自由な方のためにパラレルレリーフを用意していまして、それで実際に小さな水槽がありまして、その中に生きた小さなミジンコとか、そういうのを展示するんです。そこに拡大したレリーフがあって、さわって形がわかると。

その横にタッチパネルがありまして、それぞれの生き物の生活なり何なりを紹介するビデオが流れるようになっていますけれども、その中で音声も紹介すると、今まで全然

音声の話は出ていなかったんですけど、検討したいと思います。

○事務局（桝永）：樹冠トレイルのほうですが、説明書の８ページに絵があるんですけども、この琵琶湖に突き出ている丸いところ、展望台までは車椅子がすれ違うような大きさを考えていましたので、車椅子とストレッチャーはそこの部分までは行けるように対応したいと考えているところです。

（４）その他

○山西会長：はい。

では、よろしくお伝えください。

それでは、そろそろ閉めさせていただきたいと思います。

展示更新につきましては、私どもも同じ業界におりますが、よく、なぜ展示更新せんといかんのやということを聞かれるんですが、そういうときには大抵４つの理由を言っています。

１つは、これは当然のことですけども、常設展示ですから、年数がたつと展示そのものが劣化してくるので、新しくする必要がある。次に、この博物館としての基本的な活動である調査研究の成果を取り込んでいく必要がある。そういう面で内容的に新しくしていく必要があるということ。それから資料収集も進んで、新しい展示資料もいっぱい集まってきているはずだから、それも展示に反映させるということですね。それと、展示手法そのものが進化をしています。これはディスプレイ業者さんの世界ですけども、そういうのも取り入れる必要がある。

そういう指標があるんじゃないかと思いますので、そこら辺、それぞれどういうものがこの機会につけ加わり、あるいはリニューアルされていくのかということを整理していかれたら、すっきりするのではないかというふうな気がしています。

私どもは、長い間展示更新ができていませんので、本当にうらやましい限りですので、ぜひ成功させていただきたいと思います。

すみません、長時間オーバーしましたけども、これできょうの議論は終わらせていただきたいと思います。

４　閉　会

○司会（中鹿副館長）：山西会長、どうもありがとうございました。

また、委員の皆様、大変熱心にご議論いただきまして、ありがとうございました。

本日いただきました貴重なご意見につきましては、全てできるかというと難しい部分もあるかと思いますけども、全てについて検討させていただいて、できるだけ対応させていただきたいというふうに思います。

なお、今年度第１回目が１２月の遅い時期、大変せわしない時期になったんですけども、次回第２回は、３月に開催をさせていただきたいと思います。年が明けると、もう３月ということで時間がないわけですけれど、また早々に日程調整をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして本日の協議会、閉会とさせていただきます。

バスが５時半に出ますので、バスをご利用の方はどうぞよろしくお願いします。

どうも本日はありがとうございました。

〔１７時１４分　閉会〕